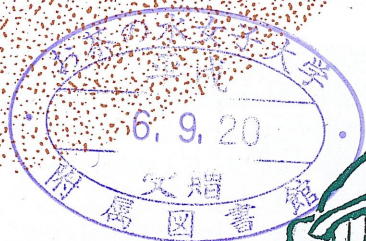


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



1994

11



第93巻 第11号 日本幼稚園協会

CD Best Collection by Naomi Abe

CDベストコレクション

阿部直美の

①One Two 手あそび編

- ①いっちょめめのドラねこ
- ②すつとあしこ
- ③パンやさんにおかいもの
- ④まきばのがつしょうだん
- ⑤トントンパチパチ
- ⑥ゲンコワやまのジャンケンポン
- ⑦おほしまゆび
- ⑧むしのおんがくかい
- ⑨さむがりやのおうま
- ⑩すてきなおくりもの
- ⑪ゆかいなおぼけ
- ⑫であみんなて

②みんなでたいそうGO!GO!GO!

- ①どうぶつたいそう1・2・3
- ②いごまきたいそう
- ③ちびっこザウルス
- ④ライオンはツツ
- ⑤かいたたいそう
- ⑥チューリップのこップ
- ⑦七五三サンバ
- ⑧うんどうかいファイブ
- ⑨マンボでやうさん
- ⑩ひつぎむしビョン
- ⑪あみよてトントン
- ⑫めさせたからしま



①One Two 手あそび編

練習しなくても簡単に遊べる作品集で、長年保育現場で人気のある曲ばかりを収録。年少児向けにも使えて便利、類書がないので現場で要望されている。

CDつき遊び方解説書で表現活動入門として役立つ。うたはCDにまかせて保育者は子どもと一緒に遊び、遊びの中から自然にリズム感や表現力を育てることに専念できるという新しい保育にそった保育資料。

②みんなでたいそうGO!GO!GO!
(日常保育と運動会のリズム表現)

日常保育や運動会にすぐ使える表現遊び曲を集めたもので、ストーリー性をもたせたリズム遊びの作品や、体で表現する体操遊びを中心に構成したCDつき遊び方解説書。

保育現場でヒットした曲を新しいアレンジで録音したもので、曲が流れると自然に体が動きだし、表現遊びにさそわれる。うきうきするような曲集。

子どもの動きやイメージを軸とした新しいリズム表現にチャレンジする保育資料。

これさえあれば、運動会のもりあがりはもう安心。



阿部直美 編著 解説書/A4変型判・48頁・CD1枚入り・定価各4,000円(本体3,883円)

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレール館

幼 児 の 教 育



第93卷 第11号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第九十三卷 第十一号 —

© 1994
日本幼稚園協会

子供讃歌.....(4)

シンガポールの旅.....津守 真.....(6)

ムクロジと子どもの遊び.....国次 太郎.....(12)

第47回日本保育学会報告

IV 発達を問い直す.....無藤 隆.....(20)



V ラウンドテーブル「早期教育は必要か」に出席して……小川 博久……(29)
VI 「家庭幼稚園」の試みとその意味と考察……東 喜代雄……(37)

NちゃんとY先生(3)……………田代 和美……(46)

ある日の育児日記から(47)……………佐藤 和代……(55)

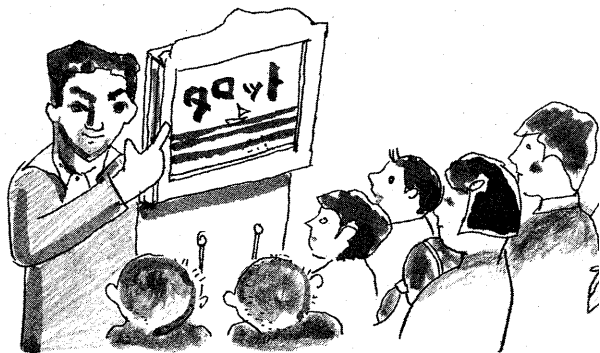
私の子ども時代(5) 夢のような明治……………中郷 誓子……(56)

表紙・梅田 なほ／扉題字・堀合 文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

編集委員・本田 和子／田代 和美
カット・福田 理恵

榊田 正子・田中三保子

編集部・大沢 啓子



子供讃歌

撮影・平野 清





シンガポールの旅

津守 真

どこの国の幼稚園、保育所を訪問しても、壁に子どもが絵を描いてあるのを見ると楽しくなる。

シンガポールの幼稚園で、壁に貼られた大きな紙に、沢山の絵が描かれていて、そのひとつひとつに私は思わず惹きつけられて見入った。大人の背の高さに描かれた人の頭から出た二本の足は、長く伸びて、床にまで届いていた。錯画期の子どもの往復線は、中央で交錯する往復線によって十字のように描かれていた。先生を描いたのだという別の人物画は、ぐるぐる回る渦巻きから成っていた。いずれも力強く、子どもの内側からあふれ出た

ものであることは明らかであった。私共に昼食のスパゲッティを用意するのに忙しい若い先生を引き止めて、ひとりひとりの話を楽しんだ。

七月末に、シンガポールで、OMEPAアジア太平洋地域理事会とセミナーが開かれ、その際にいくつかの幼稚園、保育園を見学する機会があった。最初は庭のない幼稚園に戸惑いを感じたが、一年中、今年の日本の夏のように暑い国では、子どもたちを太陽の熱から守るために、ブラインドで窓をおおって室内で過ごす必要性が、じきに分かった。文字や数の指導が幼稚園に求められるこの地の一般的傾向の中でも、子どもの主体的な遊びを重んじてそれを実現したいと思っているのだと、その幼稚園の園長さんは私に言われた。頃のその地道な努力がなかったら、子どもの心が表現された描画は生まれないだろう。帰り際、園長さんは、私に、若い先生を励ましてくれて有り難うと礼を言われた。

タイ、フィリピン、マレーシア、フィジー、ニュージーランド、オーストラリアなどから八〇人程、シンガポールから二〇〇人程集まって、セミナーは盛会だった。今回のテーマは、「すべての子どもたちに学習を容易にするために」だったが、障害をもつ子どもものが多く含まれていて、私にも何かレポートしてほしいと委員長から頼まれていた。主題講演は、米国で聴覚障害を専門とするホッホマンという、シンガポールの大学の客員教授だった。これまで、すべてのことを知っているともみなされる専門家が中心にいて、親や

先生を教え指導するのが障害児教育であると考えられて来たが、今や、そのことは、コペルニクスの転回をしつつある。中心にいるのは、子どもと家族であって、専門家はそれを周縁で支援する人であるというのが主題講演で強調された点であった。私は日本でもこれまでその逆の考えが支配的であったことを思った。アジア各地からの個人発表でも、子どもに即した考え方が多かった。『ビヘイヴィア・モディファイケーション』と題するレポートでも、否定的な強化はさまざまな逆効果が出るのが実際であることが報告され、また、多動の子どものケース研究では、終始一人の子どもの具体的なことが話題となった。そのレポートをされた先生の養護学校は、市の中心部からすぐの場所にあり、あと一日あれば私を案内できたのにと残念がられた。その学校は幼児から高等部まであるが、庭がない。校長先生はニュージーランド出身の女性で、ニュージーランドのように子どもの施設には庭が欲しいと思い、市に要請して、数年後に庭ができるのだと話された。考えは進歩的なその先生が、実際に多動の子どもと毎日どのようにして過ごしているのか興味深かった。こういう子どもたちについての悩みは世界共通である。

セミナーに先立って、アジア太平洋地域の O M E P 理事会が開かれた。その開催はこの地域の O M E P 副総裁である土山先生の尽力によるところが大きい。それは終始和やかに行われたが、一つの事件があった。シンガポール O M E P が、ユネスコ代表を招待したと

ころ、野蛮な刑罰や疑問視される法体系をもつ国からの招待を受けることはできない、という断り状がきた。米国の少年がシンガポールで鞭打ち刑の判決を受けたことが、日本でも新聞に報じられたとき、私はこんなことが現代にありうるのかと思った。シンガポールの人の話によると、そのことは現地ではほとんど知られていないとのことで、実際には、形だけの刑であるらしいが、問題はそのこと自体ではない。理事会の席で多くのアジアの人たちが言ったことは、人種、国籍、宗教、政治信条の別なく、子どもの幸福のために協力するのがOMEPPであるのに、その会合にこのような理由で出席を拒否するのは、OMEPPの精神と規約に反するのではないかということであった。アジアの人たちのそれぞれが、個人として、明瞭に自分の意見を述べ、それを決議にまとめてゆく会議の進め方には感心した。

シンガポールは、かつて英国の植民地であった。小さな島であるが、現在は一独立国である。住宅は殆どが高層住宅になり、自然保護も計画的になされ、清潔で緑の多い、近代的な都市、アジアと世界を結ぶ交通の要地である。かつての漁村の面影は全くない。

帰路、チャンギー空港にゆく途中、私は、タクシーの運転手に頼んで、チャンギーの海岸に立ち寄ってもらった。それは五年前に亡くなった私の兄が、敗戦後に、シンガポールで英国軍の捕虜になり、三年半、チャンギーで港の使役をさせられていたからである。兄

は、昭和十七年に入隊し、スマトラで三年間、陸軍一兵卒として過ごし、最後まで将校にならず、兵長であった。日本への帰還船がシンガポールに立ち寄ったとき、そこで留められたのであった。当時大学生であった私は、何人かの友人とともに、シンガポール抑留者の帰還促進運動をした。英国大使館に陳情にゆき、赤門の前に立ち、毎月のように父と横須賀に復員船を探しにいった。昭和二三年によく帰って来た兄は、シンガポールのことをあまり語らなかった。あらゆる労働をしたとだけ言っていた。私は今回の会議を終えるまで、シンガポールを兄と結び付けて考えていなかったのだが、帰り際に地図を見て、チャンギーという名が空港の場所の地名であるのを知り、立ち寄ってみようという気を起こしたのである。チャンギーの海岸近く、大きな刑務所があり、軍隊の兵舎があった。シンガポールはいまも徴兵制度である。十八歳から、二年半の義務である。砂浜はキャンプ場になっていて、若い人たちが海水着姿で歩いていた。ジョホール海峡を隔てて、向こう側に緑の丘が見えるのがマレー半島だと運転手が教えてくれた。いま、港はマレーシアにゆくフェリーに使われているだけである。私はタクシーをおりて、しばらく海を眺めてたずんだ。朝の太陽が水平線に昇ったところだった。この同じ場所で、五〇年前に、いつ日本に帰れるかも分からずに暑さのなかで労働をしていた人たちがいたことを、知っている人は今は殆どいない。

この五〇年間を生きた者の目から見ても、世界は激しく変化した。基調講演でホッホマンが述べたように、いまや、専門家が中心に位置するのではなく、家族と子どもが中心にいて、それを支えるのが専門家である。保育と教育において特にそうである。あと一年後にはO M E P世界大会が横浜で開かれる。変化する世界の一端を担う会合である。

(愛育養護学校)



ムクロジと子ども遊び

国次 太郎

佐賀大学教育学部附属幼稚園の園庭は、極端に言えば、三日月のような形をしています。凹んだ側に顔を描いたとすると、中心の鼻のあたりにムクロジの樹があります。樹高は10 m足らずで、幹の直径は約40 cm、根元が心もち高くなっていて、子ども達の遊びの中心の一つです。陣取りのときは、一方の陣になります。この樹の下ではままごともよく開催さ

れています。また、木登りにちょうどいい枝振りですから、元気な子がよく登っています。(写真1)

夏の花火会のとぎのちょうちんも、秋の運動会のとぎの万国旗もこの樹を基点に飾ります。運動会ときは、この樹がでしゃばっているの、コースを少し曲げることになっています。園庭には、この他に、もっと大きく20 mはありそうな四本のクスノキ



▶写真1

やすばらしい藤棚などもあり注意を引きますが、このムクロジも本園では気になる樹の中に入れられま

す。
ムクロジ（無患子、無患樹、木槵子、学名

ています。

ムクロジの果実は球形で直径約20mm、基部の片側に未発達の花皮を盤状につけています。ちょうど袋一杯に何かを入れて口をしばったように見えます。

Sapindus Mukurossi Gaertn.) は、ムクロジ科の落葉高木で、別称を、ムクツブ、モクゲンジというそうですが、佐賀ではムクロと呼んでいます。
ムクロジの呼び名は、その中国名木槵子（もく・げん・し）が、同じムクロジ科のモクゲンジの中国名木欒子（もく・らん・し）と入れ代わったものと牧野植物図鑑では説明しています。

ムクロジ科には、楊貴妃が好んだといわれるレイシ（荔枝）も入っています。

果実のなかに意外に大きくて硬い楕円体の種子が一個入っていると、よく似

中に一個ある種子は黒くて硬く、球に近い楕円体で直径約12mmです。一方に褐色の綿毛がついています。果皮は石鹼のなかつが、容易にとれてしまいます。

▼カッター



た頃から洗剤として使用され、特に、絹などを洗うのに適しているとのこと。種子は羽根突き（カッター）の羽根の球に使われました。

私共がムクロジに関心をもつのは、羽根突きという昔の遊びに使われたので、子どものころが懐かしく郷愁を誘われるからでしょう。その羽根の球がこんな木の実であったという思いがけない発見の喜びと驚きが重なります。

平成生まれの現在の園児達は、そんな事情には関係ないので、それぞれ素直な興味をもって、独自の楽しみ方をしています。園児達は、昔からのお正月の遊びということで先生方が正月明けにやって見せる羽根突き（カッター）に心をしめして、羽子板、羽根の姿や形に興味をもちますが、羽根突きが自分ではうまくいかないので、その興味も長くは続きません。

園庭のムクロジは六月に枝の先に大きな円錐花序をつけ、淡緑色の目立たない花がたくさん咲きま

す。そのときは黒く大きなクマバチが集まりますのでよく分かります。夏には緑色の実がだんだん大きくなりはじめ、同時に落ちはじめます。虫に食われたか自然に淘汰されるのか未熟なまま落ちてきま

す。
冬には、果皮も黄褐色になり、中の種子が黒く硬くなっています。乾いた実を振ると、中の種子がカラカラと軽い音をたてます。乾いた実は冬から春にかけてずっと落ち続けます。次の新しい実ができて

も昨年の古い実は落ち続けますから、七月には8mm位の新しい実と二種類落ちていきます。(カット2)
ムクロジは夏には気持ちのよい木陰を作ります。ムクロジの葉は互生、有柄、大形、羽状複葉、長さ約50cm、小葉は広皮針形、全縁。ちょうど、お吸い物に入れるサンショウの葉の柄についた小葉を細くして、全体をずっと大きく拡大したような葉です。

ムクロジの葉は秋には黄葉して、小葉と柄がばら

▲カット2



ばらになって散ります。冬には、枯れ枝にたくさんの実がぶらさがっていて、スズカケはこの木の名前でもよいと思われるような姿になります。(写真2)

乾燥した果皮は鼈甲のような色で手で割れますが、水気が多いときはヌルヌルするので子ども達は



さわりがりません。しかし、園児達のなかには、このマルナルを本来の使い方である洗濯に利用した子もいました。普通、園児達は地面に落ちた果実を靴でグリグリと踏み付けて種子を取り出しています。

ドングリと違って、ムクロジの熟した種子は乾燥すると、さらにつやがでて非常に硬くしかも軽くてよく弾みます。数珠や羽根の球に使われたのも無理のないことです。

年配の方のお話では、ムクロジの種子を集めて売ればいいアルバイトになったそうです。また、この種子をビー玉のように使って遊んだということがあります。

ムクロジを使った昔の遊び「むくろ打ち」を紹介しましょう。

◎ 小さい板ぎれ、普通は昔の板製の塵取りの裏側であったそうですが、その板ぎれを立てかけて、前

に横線を引いておきます。定位置からその板ぎれに順番にムクロジの種子を投げつけて、跳ね返った種子の位置が横線に最も近い子が勝ちというものです。板ぎれの真上から垂直に自然落下させたり、前の横線を越えたと失格になったり、引き続き自分の種子を仲間の種子に当てて取るといった別のゲームに進行したりするなど、この遊びのルールにはいろいろなバラエティがありました。いずれにしろ、羽子板で羽根を突いたときに聞かれる硬く乾いた音と種子の弾性を、男の子も楽しんでいたようです。

佐賀県保健体育研究会体育学習研究会編著『佐賀県につたわることも遊び』（光文書院、一九八四）には類似のルールの「むくろ打ち」と「天から落とし」が紹介されています。また、この本では種子は拾ったり店で買ったりして使ったことや、ムクロジの樹が少なくなつてビー玉が手に入りやすくなったので、これらの遊びが廃れたことなどが記述

されています。

園児達はさまざまな遊びを工夫します。先生方から聞いたうち、いくつか紹介しましょう。

◎ 大きな板を斜めに置いて、その上に積み木などで障害物をいくつも作り、ムクロジの種子を上から転がして、落ち方を楽しみます。傾けたパチンコと似たようなものです。種子が弾みながら転がって行きますから、弾性と音を楽しむ点は昔の遊びと共通しています。また、種子は楕円体なので必ずしもまっすぐには進まないところが興味を増すようです。同時にたくさん転がして、砂場の山から水を流すような遊び方もしています。

◎ トランポリンの上にたくさんムクロジの種子を乗せたまま一緒に弾みます。ぬいぐるみや人形も仲間に入れたりします。種子がいろいろな弾み方をするのが面白いようです。

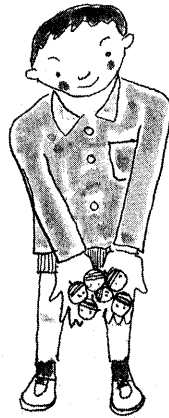
◎ 牛乳パックなどに種子を入れて、マラカスを作

ります。ジュズダマや小石や砂を入れたりもしますが、それらに比べて柔らかい音が出ます。

◎ 園にニワトリはいますが、正式な羽根を自家製で作ることはしません。種子が未熟であれば穴をあけるのは簡単ですが、乾燥した種子に穴をあけることは難しく、不用意に試みると種子より先に指に穴があきそうです。昔、多量の羽根を作るとき、どのようにして竹ひごを突き刺したのでしょうか。

卒園した小学生が生活科で羽根を作るといって拾いに来たことがあります。その子は種子をポリエチレンでくるんできつくしばって端をギザギザに切って羽根にしました。

◎ きれいな黄色の落ち葉を頭と鉢巻の間に差し込みます。二枚差せば、ウサギなど動物の耳になります。一枚差して、インディアンの子どもになり、たくさん並べて差して、大人のインディアンになります。もちろん、インディアンの羽根飾りのつもりで



す。

◎ 落ち葉に混じった長い葉柄は、ままごとの焚火の薪になりました。また、たくさん束ねて、庭ぼろきになることもありました。

◎ ままごとは、場所や場面を変えながらよく遊ば

れます。そのなかで、ムクロジの実や葉はいろいろな料理の材料になります。例えば、黒い種子は砂や粘土のケーキのデコレーションになっていました。

◎ 種子ですから、ムクロジの種子を園児はお好みの場所に植えます。砂場に植えるのはいつものことです。園内のまさかと思う場所に芽生えて順調に育っている運のいい幼木があります。園外でも幼木を発見することがあります。このなかにはきつと何年前の園児の活動の結果が入っているはずですよ。

このような園児達の遊びには、大人の常識とは違うものが見方が見られ、驚いたり納得したりしています。また、園児達は大人になったとき、私共とは異なったムクロジ観と郷愁をもつのでしょうか。

遊び自体について言えば、園児達の遊びにくらべると、「むくろ打ち」などは勝ち負けの厳しい遊びです。年上の子どもの達のものらしく、ルールが工夫されていて、技術が必要であり、遊び方に磨きがか

かっています。当時の幼児達はせいぜいそばで見物していただけで参加はできなかったでしょう。

羽根突きはながく受け継がれてきた遊びですが、お正月の遊びとして遊ぶ期間などが限定されていたし、バドミントンやテニスといった既製のスポーツが輸入されたので、羽根突きのルールや技術などが発達してバドミントンのようなスポーツになることができなかったのでしょうか。

本園のムクロジを使った遊びの紹介をさせていただいただけでなく、ムクロジを通して、遊びの発生や伝承、ゲームとしての磨かれ方、ルールや技術の発達などいろいろと考える機会を与えていただきました。ありがとうございます。

(佐賀大学教育学部附属幼稚園園長)

発達を問い直す

無藤 隆

はじめに

先日の昭和女子大学における保育学会ラウンドテーブルで、「発達を問い直す」というテーマを、早稲田大学の宮崎清孝氏、帝京大学の藤崎春代氏と議論した。各々が言いたいことを言い、フロアからの発言も相まって、面白いものとなったと思う。本稿はそのときの議論を受けて、改めて現在の時点で私の考えを記したものである。

保育との関連において、発達を有効な概念とするにはどうしたらよいのかという点から考えたい。保育ということを言い出さなくても、発達というところを見直す必要はあるのだが、とりわけ保育ということでは発達における従来の考えそのままを受け入れるわけにはいかない。もっとも、従来の考えといても、発達心理学で問題にしている発達概念と（その中のバリエーションについては、無藤編『現

代発達心理学入門』ミネルヴァ書房、の序章を参照)、保育の世界で普通問題にしている発達概念とは重なりつつ異なっている。この後者の発達か何を意味しているかは、正面切った議論がないので、実はよく分からない。子どもに内在するよくなる傾向であり、年齢に応じた規則性を持ちつつ、子ども一人の独自の規則性があるとも言われるようだ(無藤による整理は、『発達と保育の間』保育講座発達心理学 ミネルヴァ書房 所収、を参照)。

保育とその感覚

保育とは何かを改めて問う必要がある。いろいろな留保条件なしにあっさり言ってしまえば、園という生活空間での子どもの活動をいかに支えるかということとしてとらえたい。園の環境の中で各々の子どもが子どもなりに様々なものや人に出会い、探索していくことが保育なのである。だから、保育の要点は、園の環境の中に何をどのように置くかという

ことと、その関わりをどのように支えるかということのはずである。

その保育の中で発達すると言えるためには、子どもの変容をとらえる必要がある。従来からある発達のテストなり、実験なりはその変容をとらえる手段である。私はその種の方法の有用性を認めるが、それがすべてではありえないと思う。生活と環境において出会うもの・人との関わりの変容は、まさにそれらのもの・人を相手にしているときにしか分からないところがあるからである。関わりとは、まさに関わりにおいてしか見ることが出来ない。

そこで必要となるのが、その場における観察である。そばに行つて、ビデオを撮ったり、メモを取ったりするのである。もちろん、子どもが気に入ったり、うまく映像に納まらなかったり、といった様々な限界がある。それでも、テストで測るよりは、関わりの度合いが多少は見えてくる。きめ細かい記述が可能になる。

だが、観察にしても、関わりの子どもにとっての意味がうまくつかめるわけではない。また、関わりが生じる文脈なり、状況なり、背景なりはビデオに映るわけではない。それらは別な形で把握するしかない。保育者の関わりの仕方も同様である。ただ、こちらは大人だから、本人がある程度は言語化できるし、後から聞き出すことも出来る。その種の才能に優れた保育者は自らの保育の関わりの様相を述べることが上手だ。

関わりを知るには、背景を含め、その関わりでの感じ方を含め、多様にとらえる必要がある。それは、結局は、その場で行うする人の感覚と、その感覚への共感でしかとらえられないのではないか。どんな資料もその行為のままになされている関わりそのものではない。子どもに関わりなど、誰にも分からないにせよ、感じとすることは出来る。保育者の感覚は本人が一番よく分かっていることには違いないが、あるところは、そばにいる人にも感じとれ

る。ただ、それが可能になるには、相当に、その場に、またその人たちに馴染みにならないと難しいだろう。しょせんは、解釈であり、経験と考察を積み上げ、解釈は動いていくが、関わりもまたそのように多層的なのかも知れない。そのような行為する人の感覚を「行為感覚」と呼びたい。

もう一方で、あらゆる行為は、そして特に保育は、その場における行為である。場としての特性を濃厚に反映しているものである。だとしたら、場の特性を、同様に把握せざるを得ないし、その把握の困難が生じる。ここでも、場に十分に馴染んでの感覚、「現場感覚」が必要とされるだろう。

それらの感覚は、その場に長い間また繰り返しながら獲得されていくものである。とはいえ、そのすべてが意識に登るものでもないし、一人の視点で見えない部分もあるが。その部分については、同種の様々な場について経験的に知っていくことが助けに

なる。実際、幼稚園のあり方は様々であり、様々でありながら共通性もある。何がよいか悪いかとは別に、その多様性の範囲を経験することにも意味があるように思う。その場にいる際の視点も種々に取り得る。保育者の立場、特定の子どもの立場、園長の立場、部外者の立場などもあり得るだろう。行為感覚を得ることは、特定の人の特定の関わりに集中することだし、同種のことを自分がしているときのこと、誰かがしているのを見たときのことなどを思い起こしながら、感覚を分節しているような気がする。肌理の細かい記述を可能にしていくことである。おそらく、観察者の記述はそれと矛盾するようであれば、観察が一面的なのであり、当事者のあるいはその場にいる人の共感的理解が優先されるべきなのである。その理解を具体化、詳細化するような観察記録が必要とされるのである。

現場についての感覚は、もう少し漠然としたところから始まるように思う。その場に参入することか

ら、徐々に皮膚に入り込んでくるものがその場の感じ方だ。その場に三〇分程度いると、既に何か感じ方に変化がある。自分の見方に広がりが出てくる。感性の窓口が広くなるとでも言えようか。近くにありものと遠くにあるものと両方が目に入ってくる。



園の空間の中のいわばメリハリがついてくる。濃いところ、薄いところが感じられる。繰り返しその場に行くようになると、その遠近の感覚がもっとはつきりしてくる。子どもたちの顔が違って見えてくる。一人一人が際立ってくるのだ。保育者の動きも、緩やかだったり、性急だったり、気に掛けていたり、楽しんでいたりとして目に映ってくる。

それらの感覚がそのまま正しいとか、他の人が見たものと同じだとか言いたいのではない。多分、馴染みにより、「感性」により、随分と違うだろう。

それに感覚は、おそらく、自然に成立するのではなく、子どもや保育者やその他の人との会話の中で、また保育についての種々の勉強を通して、変容せざるを得ない。生の純粹の元となる感覚などを私は信じていない。だが、その感覚がどれほど「汚染」されていようと、そこから出発するしか、関わりの様相とその意味をとらえる手段はない。たとえ、主観的で片寄っていようと、とりあえずそれを述べてみるし

かない。ただ、それを他の情報により補正し、膨らませることはできる。それが、保育の何らかの記録による分析だろう。

保育が園の環境の探索の問題だとして、その探索の様相全体は結局、行為と現場の感覚からとらえるしかないのだ。その感覚が、子どもがまた保育者が保育を生きる様相だろうからだ。保育の議論で言われるあらゆる概念は、その感覚から吟味して検討していくべきなのである。

観察から保育へ

だが、感覚だけですべてが済むのではない。感覚を豊かに深くするには、感覚から離れての資料もいるというのが私の研究への立場である。また、発達と保育の結びつきが必要だとすればそうなるのである。共に、主体の持つ意味を取り上げると同時に、その意味を超えての変容を問題とするからである。また、生活全体のあり方をとらえようとすることから

ある。

感覚をとらえるのに、そばから見ていただけで分かるかと言えば、答は肯定・否定半々というものだろう。十分にその主体の感覚をとらえることは行為する主体以外には出来ない。だが、見ている者にとって、まったくとらえられないものでもない。行為する人間にとって、感覚を同時に意識化するのは容易ではない。思い起こすことは、常に、他の行為の感覚を重ねていくこともある。当事者であることが観察者であることと入り交じってくる。

その上に、感覚を自覚することは、感覚に違和感をもたらず行為を必要とすると思う。自覚化することとは、単にそのときのことを甦えらせることではない。感性的でありつつも、もっと総合的な考察である。そこでは具体的な違和をもたらずものとして、きめ細かい記述を可能にするものが必要だ。それが観察であり、あるいは歴史的考察だ。場にとってよく知らぬものの目の働きである。明らかに場に馴染

めばよいのではない。馴染むと同時に、突き放せねばならない。

保育も発達も、まさに目に見え、実感できる関わりであり、そこでの「飛躍」として成り立つ。子どもが伸びるというある瞬間の実感が保育を支え、発達するというあり方を確信させる。だが、それが長期的に子どもを変容させるかどうかは分からない。確かなことは、いつの間にか子どもが変わっていることだ。長期的な変容を追いつめ、詳細にとらえることは、どこかで感覚から離れることだ。少なくとも、当の行為を目にする際の実感そのものではない。

発達から保育へ

発達とは、突き放しての長期的な見方からすれば、子どもものの基礎的な能力の変容である。確かに、基礎的な、例えば、記憶力や情報処理の力などが幼児期に大きく変化し、幼児の特徴的な行動のあり方を規

定している。一人一人の違いを見ることも大切だが、年齢間の明らかにある大きな違いを無視するのもおかしい。そして、そのような大きな違いは、子どもの持つ内的な基礎的能力の変化を想定する以外には説明できない。

しかし、同時に、発達のな容は子どもの関わりのある方の変貌でもある。子どもが砂場の砂を掘るのに、ただシャベルで浅く砂をかきだしていたのが、力を込めて深く穴らしい穴を掘るようになった。そこに、確かに関わりの変貌がある。おそらく基礎的な能力としての変化がそこで生じるようなことではないだろうが、変貌に違いない。そして、子どもが関わりつつ変貌する姿は、例えば、このようなものであり、特別に基礎的な能力を引き起こす体験があるのではない。この種のことの積み重ね以外にはありえない。保育者が手がかりとし、具体的に関わりようがあるのも、このレベルの変貌である。この変貌もまた発達の別の面として位置づけるべき



なのである。そうでなければ、発達という概念は保育の中に生きようがないからである。

それは言い替えば生活の中での子どもの姿をとらえるということだ。すると、生活の各々の局面での子どもの姿は、その局面のいわば構造的な特質と

セットとして分析する必要がある（拙著『幼児教育と小学校教育』岩波講座・幼児の生活と教育、第1巻 岩波書店）。例えば、食事の場面と「遊び」の場面とでは、そこに働く規制や目指される方向が異なる。置かれているものも、大人の働きかけも違う。幼児であれば、遊びでは比較的自由にさせている大人も、食事ならマナーについてとか、食べ終えるようにといった口をはさむかも知れない。同じ遊びでも、ごっこ遊びと砂遊びでは、性質が異なる。同じ砂場といっても、その広さ、砂の性質、水場との関連などで遊びが変化する。環境の特性が問題だ。

その一方で、そこでの子どもの関わりのある方を取りだし、また子どもの受け止め方をとらえる必要がある。それが既に述べたように、共感的な感覚の問題であり、感性的な把握を基礎としての分析である。

例えば、滑り台のような遊びは、砂場と違って、

遊び方が固定されており、登り方や滑り方を工夫したところで、多くの年長児の興味を引くものではないようだ。年少児には、その固定されているところがむしろ安定感があるのだろうし、一定の手順で登り滑ることがサイクルをなすのも都合がよいようだ。上下の視野の落差と、滑るといふ身を任せての動きとがスリルを呼ぶ。砂場の場合に、どの程度、深さがあるのか、大きなシャベルが用意してあるのかで、年長児にとっての面白さが変わる。おもちゃや人形などの持ち込みがどれほど認められ、邪魔されないかで、ごっこ遊びのようになるのかどうかが変わってくるようだ。

さらに、子どもの関わりが生活の諸局面においてどのように広がり、変貌していくかの分析をしていくことで、発達の問題となる。そのためには、先の生活の構造的なとらえ方と感性的なとらえ方を結び付け、組織的に解明していかなければならない。こ

の段階になれば、発達の分析と保育の分析のいわば結合したものとなるはずである。発達を問い直すことは、この段階に至って、初めて保育にとって実質的な意味を持つのだと思う。

おわりに

抽象的に述べすぎたように思う。私が実際に行っていることは簡単なことだ。幼稚園に行き、座り込んだり、眺めたりしているのである。その内に、視野が立体化し、身体の内側まで染み込んでくるものがある。それを頼りにしつつ、今度は細かい記述をすべく、ビデオを撮ったり、子どもや保育者にインタビューしたりするのである。場面を絞ったり、他の園と比べたり、間を置いてまた来たりするのである。そこで分かってきたと知っていることを多少論理化したのがこの議論であった。

それは、一つの園にかなり密に関わり、繰り返し出かけながら、保育者とも話し合うことが必要であ

る。それは、単に観察や客観的研究の域を超えて、保育について学び合うことと、その園の保育の在り方を変えていくことの両方を含むことになるだろう。もう一方では、様々な園の保育を見ていく必要もある。幼稚園の保育の面白さは、その多様さにあるとよく思う。その幅の広がりの可能性は相当に大きい。もちろん、その広がりを大きくすればよいのではない。何を選ぶのかは、個別の園の事情と、保育者や親の考えで決まってくることだ。ただ、保育を知るには、他の園と組織的に比較しないまでも、いわば感覚としてその広がりを感じとれることも大切だと思うのである。たとえば、一度の短い時間の見学でも、その広がりを知る上での益がある。書いたもので学ぶにしても、その核には、現場で得た何かの感覚があるべきだと思うのである。そして、その感覚を広げ、深める努力を怠るべきでないと警戒する次第である。

(お茶の水女子大学生活科学部)

ラウンドテーブル「早期教育は

必要か」に出席して

小川 博久

一、問題群の象徴としての「早期教育」

「早期教育は必要か」について、小児科医の毛利子来氏、桐花教育研究所の横山範子氏と論じあった。登壇者の一人として今さら何をかけばいいのかと迷う。自己の主張が明確だと思いついても、実際は山中で迷ってしまった小動物のような気持ちも残っているからである。だからこのラウンドテーブルを振り返ることは気分的に重い。当日、風邪をこじらせ、熱があつて出席した

ときの気分も今引きずっているのかもしれない。弁解がましいいことを言っても仕方ないので、私をそうした気分にした要因を振り返ってみよう。

まず、「早期教育は必要か」というテーマはこの十数年来、今日的課題として幼児教育関係者を引きつけてきたものである。またそれは、幼児期・児童期の子どもを持つ親にとつても身近な問題である。と同時に幼児教育関係者、特に、保育者や経営者にとつて自分達の保育実

践の原理を決定するにあたって避けて通れない問題であるともいえる。また保育研究者にとってもどのような幼児の育ちが妥当と考えるか、幼児観、発達観の決定を迫られるからである。

その意味ではこのテーマは学問的論争の対象となり得るかにみえる。このように「早期教育」があらゆる立場の人々の関心の的になり得る問題と映るのである。これはラウンドテーブルにあふれるばかりの会員を集めたことから明白である。

しかし、よく考えてみれば、様々な立場の人々から様々な関心を集め得る問題としての「早期教育」は明確な解答を用意し得る一つの問いと言うより、多様な問題性を含み得る一つの象徴あるいはスローガンと言った方がよいものである。たとえば、現代人の娯楽観の象徴としてのディズニールランドと言ったようなものだ。ディズニールランドはいろいろな立場の人々の様々な関心の対象であり得るとともに、それにはあらゆる問いの立て方と答え方が可能になるからである。

二、親と子の対幻想としての「早期教育」

「早期教育」は何よりもまず、親達の関心の的である。今日の学歴社会で自分の子どもの幸福を願うのが多くの親の気持ちである。中流意識をもつ多くの親にとって自分の家庭や家族の成員の幸福度を測る目安でもある。中流意識においては、学歴こそ自分の経済的社会的地位の上昇を可能にする階段であるとは教育社会学の常識である。こうした意識に強く支配された人々にとっては、「早期教育」に対する否定的評価が強力な情報として流布されないかぎり、あるタイプの「早期教育」は否定しても、もっと良い「早期教育」はあるはずだと考えるだろう。あるいは、他の子どもには否定的な評価となった情報があつたとしても、わが子にはそれは当てはまらないと思いたくなるであろう。ここでは子どもの幸福は自分の幸福をさらに家族の幸福と一体化される。このように「早期教育」が親と子の、あるいは個々の家族の対幻想として登場するかぎり、それは討論課題としてよりむしろ、個々の当事者の私事性として閉じ込めることが可

能なのである。それは、いかにフェミニズムの議論が世間で云々されていても、「妻は夫に従順であるべきだ」といった信念で暮らす夫婦がいて、それを幸福だと言われるならば、その夫婦は、フェミニズム論争と無縁で生きていられるのと似ている。そうした生き方が結局、破局を来すことがない限り、無風の中で生きられるのである。「早期教育」もしかりである。

しかも、「早期教育」は、こうした個々の当事者の夢を根絶やしにする結果は生まないのである。「早期教育」でしくじった子どももいれば、それで成功したと思わせられる結果も生むのである。もちろんその結果が「早期教育」のおかげであるかどうかは全く確かなことではないにしても、中流意識に呪縛されている人々にとっては、信ずるが勝ちなのである。かくて専門家や評論家が口をすっぱくして、「早期教育」の危険性を叫んでも、それは馬耳東風というわけである。

三、教育産業としての「早期教育」

現在、わが国は資本主義社会である。この社会では法の許す範囲で利益を追求することは原則として善である。需要として「早期教育」を求める人々がいる限り、その人々の需要に答えるような企業を起こすことは、社会の発展に貢献することだとされる。それは予備校の発展をみれば歴然たるものである。かくて「早期教育」を標榜して教育産業を起こすことは決して非難に当たらない。また「早期教育」という名辞を使わないにしても、敵しい受験を勝ち抜くための戦略を身につけるような準備教育をできるだけ早い年齢から教授するということを法的に非難する根拠はない。

そしてそうした仕事に従事する人々が、自己の営利的営みを同時にある種の社会的に望ましい仕事だと信じ、それをその人々の教育理念としてかかけることも十分考えられる。以前、予備校と私立大学を兼務していた人の結婚式に招待されたとき、大学で教育学を研究する友人よりも、招待された予備校の同僚の挨拶の方が、意気軒昂で日本の教育の将来を担うのはわれわれだという趣旨

の概をとばしていたのを思いだすのである。

予備校の教師が日本の教育を担うのはわれわれだと主張することにとにかく言うつもりもない。ただ、「早期教育」やこの種の「受験教育」を推進する人々の教育理念は、利益追求と不即不離であり、その理念を放棄し、別の理念を選択することは利益追求も放棄することにならぬ。ゆえに、自己の教育理念に疑念を抱いたり、反省したりすることは原理的に成立しえない。この人々の教育理念は他者との討論を通して変更する可能性はほとんど無いと考えるよいだらう。もし彼等が討論に参加したとすれば、自己防衛か自己正当化の論だけである。こういう人を相手に討論することは、信念 (Belief) 体系を批判する試みであり、はね返される可能性が大きい。ここにもまた深い疲労感を伴う状況がある。

四、教育論議の対象としての「早期教育」論の可能性

前述のような生々しい問題の立て方は除外し、もっと

軽いフットワークで「早期教育」を問題にできるだろうか。そのために必要な条件は、まず第一に「早期教育」の定義問題である。

ところが、結論的にいえば、「早期教育」論議のための有効なプログラム定義など簡単には見つかりそうもないのだ。まず第一に「早期」とはどういう意味か。「早期」とは、一般に考えられているより早くということである。つまり、教えられるべき内容と時期との間には、一般的に常識的見解が成立している。そしてその常識の根拠には、子どもの発達はこのようになるという通念がある。しかし、この発達観 (例えば、ピアジェの発達観とその流れ) は、この時期にしかじかのことを教えてよいかわるいかにについて答えてくれない。つまり、教えたり、働きかけたりすることと発達の筋道との間の因果関係は語ってはくれないのである。未だ発達心理学は教育論の根拠とはなりえていないのだ。

だとしたら、教えてみて、実際に子どもの能力の向上が認められたら、当然教えていくべきで、ただ見守って

いるより積極的でないのではないかと反論が生じるはずである。一九六〇年代のJ・S・ブルーナーの仮説はそうした立場を表出したものであった。しかし話はそう簡単ではなかった。実験直後にテスト結果で成績が向上したとしても、長期的にみて能力が向上したという証拠は何もあがらなかったからである。

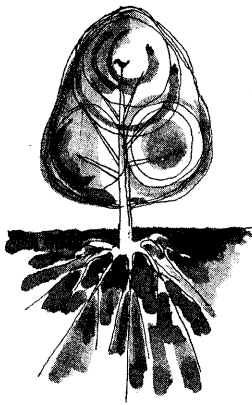
それよりも大きな問題は、個々の教授内容についてかに成績が上がったということが、その子どもの発達の全面にわたって望ましい育ちを保障することになるのかは全く明らかでないことである。つまり、実証主義的な立場で「早期教育」の妥当性について検討することに限界がきてしまうのである。

問題は再び、「早期教育」とは何かという出発点に立ち帰ってしまうのである。いったい何のために、何をどの程度まで「早く」教えたり、働きかけたりすべきなのか。まさに「早期教育」論議は気がついてみると出発点に舞いもどる迷路のようなのである。どこかで「早期教育」論議はこうした性格をもつものだという予感が私に

あったにもかかわらず、その火中に飛び込んでしまった自分のおろかさを痛感せずにはいられない。

五、ラウンドテーブルの風景を振り返って

今、思い起こしてみると、毛利氏の立場はきわめて明確であったと思う。氏は、「早期教育」は目的においても方法においても誤った教育運動であり、それは具体的に論証できるといふ形で、「早期教育」の思想性を撃つ



という立場で徹底していた。その運動の代表として公文式の理論を批判した毛利氏に対し、公文と私は同じではないので、毛利氏の批判と自分とは関係ないという立場で桐花教育研究会の教育の目的・内容・方法の妥当性を主張し続けた横山氏の見解も、企業でもある桐花教育研究所の代表として、自己の教育実践の正当性のために一貫性をもっていたといえる。

その両者の間でさまざまに続けたのは私ではなかったかという反省がある。もちろん、私の主張が一貫性を欠いていたとは思わない。しかし、自分が果たすべき役割が最後までクリアに見えていなかったという印象が強い。理由をさぐってみると、一つは、横山氏の主張と筆者の主張とに一番対立点があると予想し、そこに争点を置いて討論を展開すれば、ラウンドテーブルとしてフロアも参加でき盛り上がるのではないかと考えていたことである。たしかにその点では一応の盛り上がりはあった。しかしそれを通じてこの問題の何が論じられるべきかは少しも明らかにならなかったからである。もう一つ

は、その点での予測の確かさが私に欠けていたこと、つまり横山氏からの反論、「早期教育不必要論」への反批判が全くなかったことである。その点は予感されていたにもかかわらず、私にはきちんと読みきれていなかった。

同時に、毛利氏と私の意見とは「早期教育不必要論」の立場で類似していたため、毛利氏との争点も見いだせずに終わった。最後に毛利氏から、私も横山氏も幼児期の遊びや学習を真面目にとらえずぎていないか、できるといいことだと考えすぎて、いいかげんに済ましてしまうことも大切ではないかといった投げかけがあった。この点は、私も大いに論じ合いたいところであったが、反論の時間もなく、残念であった。少なくとも、こんな議論では、プラトンの言うシンポジオン（饗宴）にならないという思いと、討論によって見えてくることの少なさに疲労感だけで帰宅したように思う。

六、「早期教育は必要か」はどう論じられるべきか

ぐちをこぼすだけでは、何の役にも立たないだろう。この討論への参加を通して、もしこの種の議論を今後やるとしたらどのようにすべきかについて私見を述べ終わるとしよう。

まず第一に、この種の議論を対幻想の問題ではなく、共同幻想論として論ずる必要がある。そのためには物理学者で幼児教育にも強い関心をもつ新井氏がフロアから発言していたように、人類の将来の展望の問題として論ずる必要がある。そうすれば、自分の子どもに「早期教育」を受けさせるべきか、それは効果があるか否かといった議論を一応括弧にくくることができる。ではそこで論ずべき課題は何か。

一つは、現在の「受験教育」「早期教育」、塾教育の隆盛は、専門家（教師）が教え（主として言葉）を媒介にして行われる知識伝達——学ぶという近代の学校が生み出した量産型の学習方式の肥大化であり、その方式を低年齢にまで拡大した結果であり、そのことの是非が問われているということである。

二つは、幼児期の成長過程で行われる学習は、二本足歩行、言語獲得、社会性の学習を含めて、観察学習（見まねる）が中核となっており、そこに言語による教授型の学習を無制限に導入することは、ヒトの進化のあり方としてマイナスにならないかということである。

三つは、これまで幼児期の教育で大きな役割を占めていたのは家庭であった。消費文化の普及は家事を省力化し、家事労働を簡略化した。多くの作業遂行を情報処理で解決できるようになった親達にとって、幼児といえども、自らの生きる論理をもった存在とつき合っていくことは、心身共にストレスを拡大させる仕事になり、育児不安を増大させた。にもかかわらず、我が子の成育に深い関心と愛情をもっている場合、多くの費用を使っている「専門家」に我が子の教育を依頼し、子どもの将来を保障すると共に、育児不安を解決しようとする。ここに子育ての「消費行為化」が生まれる。この傾向は、親と子の関係の中で形成されるべき人間の資質の面で欠落を生むのではないか。人間の相互理解、連帯感、思いやりな

どは、十分に育ちうるのであろうか。何よりも共同生活の中で親の子どもに対するこのような面での形成力を低下させるのではないか。

このように考えると、「早期教育」の問題は学校教育で行われている「教え——学ぶ」という学習スタイルの肥大化は妥当かという問題であり、人類の将来にとって、子どもの学びのあり方はどうあるべきかの問題として設定すべきであった。とすれば、私の横山氏への批判は、まず現代の学校教育の支配的学習観である「教え——学ぶ」というスタイルを無原則に拡大することは、人の育ちのあり方として妥当かという問いとして設定すべきであった。特にこれまでの学校教育での学習観では、既知者（成熟者） 〓教師、と未知者（未熟者） 〓子ども、という関係性を固定化してきた。その中で、自立的学習者としての子どもの存在、表現者としての子どもの能力を低くとらえてきた。そのことで子どもの自己形成力を低く評価し、大人が子どもとの関係で管理者、統制者としての役割を益々増大させてしまったという問題への反省

的討議が必要であった。

以上のような形でのディスカッションを可能にするために、まずすべきは、私自らがそうした学校教育での学習観に手を貸してきたという事実への省察が必要であろう。その意味で、フロアの滝坂氏が、「早期教育」といわれる動きを批判すべきだということを前提にしてラウンドテーブルが行われるとしたら、それは望ましくないといった意見は、改めて傾聴に値すると思う。なによりも自らの内なる「学習観」と、その前提にある大人——子どもの関係性への問い直しが求められるからである。私にとってラウンドテーブルに出席したときより、ここで、ラウンドテーブルについて反省の機会を与えられたことの方が学びになったことを感謝したい。

（東京学芸大学）

「家庭幼稚園」の試み

その意味と考察

東 喜代雄

当狭山ひかり幼稚園では、一九七四年から「家庭幼稚園」と称する実践を続けている。それはほんなことがきっかけであった。村の古老を招いて糸をつむぐ「座ぐり」をやったとき、その功的な手捌きを見ていた一人の幼児が、いきなり老人に向かつて「先生！ あのさー」と話しかけたのである。ちよつと照れくさそうであったがその老人は、

「なー」と受けてくれた。それを見て、私は「これこそ幼稚園だ」と直感した。

「教育要領」や「設置基準」がなくても幼児のいるところはどこでも「幼稚園になりうる」と考えた。以来二〇年、家庭の全面的な協力を得て中断することなく続けることができた。それは実践することの意味の深さとその効用を確認する営みでもあった。

「家庭幼稚園」とは？

読者は「家庭幼稚園」と言っても理解できないと思うので前置きしておきたい。当時私たちは、比較的に子どもたちの生活経験の幅が狭く、交友関係も広がりにくいこと、また母親たちも閉塞的でわが子を近視眼的に理解しがちであること、子育てについては理論や知識は持ちながら、実際面ではどのようなにわが子に接したらよいかわからないというようにな、いわば自信を持ってない状態であることを感じていた。この試みはそうした私たちの課題意識と摸索の中から生まれた。

実践はまず年長組を五、六人のグループに分け、十月中旬から十一月にかけてそれぞれ当番の家を回る。当番の母親または父親は、各家庭の特長を生かしながらそこでできる範囲のプログラムを作り、一日保育者の役割を演じる。もちろん祖父母や、街の人々が先生の役割を担うこともある。グループのメンバーが発表されると、親たちは共同して計画書を

作り、順番を決め、保育の内容を検討する。もちろん事後には報告書を提出する。

以下は、一九九三年に提出されたレポートから「園と家庭、地域との連携」に視点を当てて整理したもので「家庭幼稚園」の試みの意味を考察しようとするものである。つまりこの試みが、じつは幼児の教育とか幼児の発達について貴重な示唆を与えていることを考察しようとするものである。

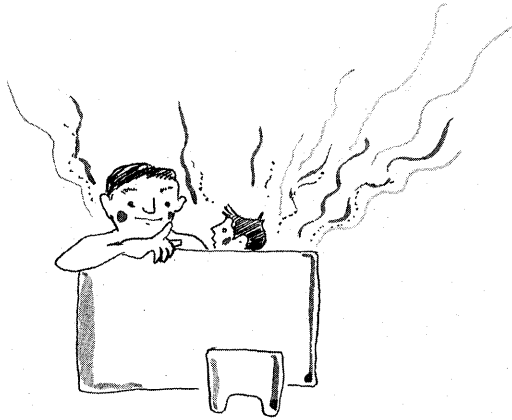
I. 「近所遊び」のきっかけになっていること

報告書は明らかに、この実践を契機に「友だちの家や、よそに出かけるようになった」「行動範囲が広がった」「泊まりに行くようになった」など交友関係と行動範囲(生活経験)の広がりを表している。

近所遊びは親や兄弟あるいは幼稚園などいわばおとなのいる環境から離れ、異質な遊び友だちとの最初の出会いの場であり、幼児にとって最初の異質化

の機会である。それは幼児が遊び友だちから自己を評価してもらったり、再確認されることにより自我の分化が促進される機会でもある。

いうまでもなく近所遊びの多寡は、幼児の成長に大いに反映していると考えられる。よく遊べる幼児ほどよく発達し、逆にあまり遊べない幼児は発達が



阻害されると考えられる。

この実践はそうした幼児の総合的な遊ぶ力を獲得する一つのきっかけになっている。近くにあるおもしろいところ、カニやムシのいるところ、イヌや動物を飼っているところ：地域で仲間と精一杯遊びほうける場所や空間を見つけたし生かしている。そのような経験は年齢が進むにしたがい貴重な意味として確認されるであろう。

Ⅱ. ノーマライゼーションとしての親たちの

取組

〔事例1・A児の場合〕

A児は自閉的傾向性があるとして市立相談所に週二回通っている。大人との交渉はうまくいくが子どもとの関係はほとんどない。特に状況や環境が変わると不安定になる。一人黙々と絵を描く。

・（この実践に参加しようと）B児が「行こう」と誘うと「行ってきまーす」と言って平気な顔で出



中央はAくん▲

発した。

・初回は園の近くのB児宅が当番だった。そこでは少し手をかけてオーブンで焼くとすぐ食べられるケーキ作りであった。家でB児の母親はAをおんぶしたり抱っこしたりして可愛がった。父親もここにこしながら写真を撮って無言ながら励ましている様子が伺えた。

・第三回はA児宅、自分の部屋やおもちゃをみんなに見せたりして楽しそうであった。

・第六回はC児宅、まず障子一杯に絵具で絵を描き、終わったら障子紙を目茶苦茶に破り、それを撒き散らしながら大声で遊んだ。Aは「Cをやっつけろー」と言って追いかけたり、とても楽しそうだった。それ以来AはBとCを探したり後を追ったり、少しずつ遊ぶようになった。

・Aのグループは、同じようにAを仲間として受け入れAの興味や状況にあわせて無理のない実践を続けた。ある母親は「Aくんがかわいくて仕方が

ない」と報告している。

*

〔事例 2・D 児の場合〕

D 児は、普段は特定の仲間と遊ぶが、気に入らないことが起こると急に怒りだし手がつけられない。癩癩は容易におさまらない。料理とものを作るのが好きである。情緒が極めて不安定である。

・ D のグループの母親たちは、D の好きなことや関心事について何回も話し合った。D の母親と一緒にお茶の会も開いている。

・ このグループでは、①プリントごっこで年賀状作り、②犬の散歩と犬小屋作り、③自宅の庭でお料理作り、④近くの公園に行つて紙飛行機を作つたり飛ばしたり、⑤段ボールで大きな象の形を作り色を塗つて、乗つたり動かして遊ぶなどした。父親の参加も三組あつた。

・ 実践終了後もグループの子どもたちは、D の家に遊びに行つたり、D を家に誘うこともある。

〔考察〕

*

毎年、心身に障害を持つ幼児を当園では迎えているが、障害を持つゆえにこの実践に参加しなかつた幼児はいない。親たちはそれぞれの幼児をわが子と同じように受け入れ、細やかな配慮を持つて接し、それらの幼児の興味や関心によりそいながら、無理のない計画を立て取り組んでいる。

人間関係がうまくいかず、順番が守れなかつたり、集中しない幼児にも担任や親たちと連絡をとりながら、それなりの対応を真剣にしている。

ハンデキャップを持っている幼児を受け入れることについても、不十分ではあつても、それらの親たちの日常生活や心情に寄り添い、体験的に考えさせられる意味は大きいと思われる。

Ⅲ. 面識が、連携を実現していること

〔面識についての調査結果〕（一九九四年一月）

年長組の母親全員にたいして、①年長組の園児、

②その母親、③その父親について面識があるかどうかというアンケート調査をおこなった。ちなみに比較するため同じ狭山市内にある市立P幼稚園の母親に対しても同じ質問の調査をおこなった。両園とも年長組は二学級、園長は同年齢である。(表参照)

*

「調査の結果と考察」

・園のおかれた歴史、環境、条件などには共通点が多いものの、調査をした面識率においてはかなりの差異があった。

・その理由は通園バスの有無、その他園からのさまざまな働きかけ、あるいは親同士の相互交流の差異が考えられる。

・「家庭幼稚園」の実践が、そのまま下の表の数字に表れたとは思わない。それは当園にとっても単なる点に過ぎないからである。通園の方法をはじめ、さまざまな生活のありようがこの差異を生む

	当園	P園
創立年 (年)	1970	1980
園児数 (人)	158	172
年長児 (人)	58	71
回答率 (%)	93(52通)	96(68通)
①園児面識率 (%)	88.3	39.5
②母親面識率 (%)	91.3	38.5
③父親面識率 (%)	33.6	14.9
通園バス	なし	あり

原因となっていると考えられる。

・しかし「連携」「人間関係」「育ち合い」は、人と人との面識からはじまっていることを考えると、

やはり日頃の触れ合い、特に幼児を媒介とした交流や活動の積み重ねが大きく影響していると考えられる。

・特に母親たちが、園児の父親について面識率が高いのは驚きであった。それは日常の生活から一歩踏み込んで、ある目的のために家族間の交流があることを示唆していると考えられる。

IV. 相互交流による育ち合いということ

〔報告書に見られる事例〕

・ M子はTを怖い人と思っていた。Tの家で家庭幼稚園がある日、母親はTの家に犬がいることを知っていてエサを持たせた。M子がTの家についてたちょうどその時犬のロープがはずれ、飛びかかろうとしたのでM子は転んだ。するとTは走りよって犬を叱りM子を助け起こした。

その時以来M子はTを怖がらなくなり、妹を誘ってときどきTの家に遊びに行くようになった。



◀ 友だちのお父さんと一緒に

た。

K子はJ子を誘って、Nの家に遊びに行った。Nは待ちきれなくて遊びに出かけそうになったので、母親が「Kちゃんたち遊びにくるんでしょ。出かけちゃー駄目よ」というと、Nは「いいのいいの、Kたちはお母さんに会いに来るんだからお母さん遊んでいてー」といって出かけてしまった。女兒のいないNの母親は、K子たちの訪問を喜んでいる。

Iコーポ(七〇戸)の幼児はおよそ半数が当園に通ってくる。Q団地(一一〇戸)からは二、三人しか来ない。Iコーポにすむ知恵遅れのY児は、当園には来ないが、あちこちの家に上がり込んで食卓の食べ物に手を出したり、黙って上がってくることもあるという。ところがコーポの人たちは、みんなしてYを可愛がっている。「ずいぶんわかるようになったね」などいいながら。

さて毎年クリスマスには園児たちはペンシルラ

イトを持って讚美歌を歌いながら街々を訪ねる。

Iコーポにいつて歌うと、拍手や紙吹雪が舞い反応が大きい。ところがQ団地では歌い始めると「いま赤ちゃんが休んだところですけどー」といわれたり電灯が消されたり反応が冷たい。

・母親Mはわが子の欠点だけが見えて、長所は全然見えなかったという。いつも「我儘で行儀が悪い」「未っ子で頼りにならない」「粗暴でしょうがない」と思っていた。ところが家庭幼稚園で知り合った母親たちから「元気で明るい」「明るくて意欲的」「よく気がついて優しい」などと聞かされ、わが子を見直したと書いている。

*

〔考察〕

・事例は多過ぎて書き切れないが、よその子ども、あるいは他人によってわが子の良さや価値、尊さを教えられているところがある。

・親も子どもたちも、他の親や子どもたちを紹介

て、いろいろなことに気付かされ、教えられ、支えられ、育ち合っている様子がうかがえる。

・幼稚園や家庭だけでは獲得できないさまざまな経験や触れ合いを実現している。

まとめ

「教育は共（協、響…）育、育ち合い」といわれる。私たちはおとな、子ども、教師を問わず、相互の触れ合いによって自分に気づき、自分を少なからず変容させている。相互の交渉や相互の触発を推進させたこの「家庭幼稚園」二〇年の実践も、それなりに意味があったと思っている。今後は今回挙げた項目ごとに、さらに具体的に突っ込んだ事例研究を試みたいと思っている。

（狭山ひかり幼稚園）

参考文献

- 「家庭幼稚園の試み」第1報、日本保育学会、一九八五年
- 同第2報、一九八七年
- 同第3報、一九八八年
- 同第4報、一九九三年
- 同第5報、一九九四年
- 上笙一郎他『日本の幼稚園』理論社、一九七四年
- 岡田正章編『フリードリッヒ・フレーベル』フレーベル館
- 小川博久他『幼児の近所遊びと保育』日本保育学会年報、一九八三年
- 谷昌恒『少年たちと生きる』日本基督教団出版局
- 津守房枝『育てるもの目』同出版局

ほか

Nちゃんとう先生(3)

自閉症児を担当した一年間の保育記録

田代 和美

月十一日(火)

十八日ぶりだったが、玄関で迎えられなかった。しかしひとりで部屋に入ってきた。「おはよう」と言うところにこする。久しぶりに見たNは、背が伸びた様に感じられた。カセットを出しておかなかったので二分ほどすると「遊戯室」と言い二階のカセットを取りに行きたい様子を見せる。すぐに応えられないでい

ると体に力を入れている。用が済み「行こう」というと一度に気分が晴れたように足取り軽くにこにこする。テープは二〇分ほどひとりで聞いていた。思ったよりもはやくカセットを聞き終えて部屋に戻ってきた。E、Y、Hが絨毯の周りを走っている。Nも私と一緒に走った。笑って私を追いかけてくる。久しぶりであったが、表情が良くてよかった。

月十三日(木)

表情がいい。なんだか楽しいらしい。カセットを聞かせなくても、今はおえかき帳を見たり、なぞったり、私に名前を書かせたりする遊びがあるのでそれらをする。遊戯室に誘うと行く。Nと私で走る。「よーいどん」と言つて端から端まで走る。久しぶりに高いところからジャンプをする(飛びついて抱き抱える)。私の顔を見て「のせてちょうだい」という。あー、サインをおぼえていられたなと思つた。

月十七日(月)

かるた遊びをするので十一時頃に星組に行った。かるたとりが始まると私の気持ちはEのほうに向いていた。Nは私の所に来て何度も「おんぶして」とおんぶをせがむ。途中カセットを聞くが、五分として聞いていない。一緒に来いとばかりに私の手を引き遊戯室に連れて行つた。Eもついてきた。絵本の部屋で「くれよんの本」と「おいしい料理の本」を見つけて見ている。その時私はEをもう一度かるたとりに挑戦させて

みよう、今ならNがひとりで遊んでいると思つた。Eに「Eちゃん、星組に行こう。Nちゃんひとりで本を読んでいるから」といった。その瞬間、Nが大きな声で泣きだした。私は一番してはいけないことをしてしまつた。一瞬私の気持ちの中でNを思っていないかつたのだろう。それを感じ取つたように思えた。私は一生懸命Nに謝つた。本当に悪かつたしやつてはいけないことだつた。自分が情けなかつた。それから思ひだしたように三回泣いた。お弁当の時には立ち直り、今日はグループの中で先生が誰もいなくても最後まで食べることができた。昼食後、お帰りまで一緒に遊んだ。今日の出来事で気持ちの大切さを改めて痛感した。

一月二十日(金)

園庭に誘つた。Nは「遊戯室」と言つて私の手を引く。「いつておいで」と言うが、ひとりでは行こうとしない。私が外に出るとNも出てくる。外に出てくるのは珍しい。飛行機ジャングルに乗つたり走つたりした。Hの作つた凧をあげてみる。初めは私があげる凧

を見て笑っていた。そのうち風を追いかける。糸を持たせると声を出して笑う。今度風作りもしてみようと思う。昼食時、私がいないとN先生のところに行き、身振りでおしっこを訴える。トイレにN先生を連れて行ったそうだ。私と一緒にいることが多い。そろそろ一段階登ってもよい（私の接し方もN自身も）のではないかと思う。一段階上といってもどんなものかうまく表現できないが……。

月二十八日（金）

私と一緒にないと嫌らしい。そろそろ別の人といっても楽しいと思えるようにさせてもよい時期にきたなと感じる。今日は私がEと粘土遊びをしていたのでT先生に文字書きをもらった。「遊戯室」といって私を連れていこうとする。T先生がYと遊戯室に行くところで「Nちゃん一緒にいこう」と手をつなごうとして下さるが、Nは「Y先生」といって興奮し、私の髪を引っ張る。仕方なく遊戯室まで一緒に行った。遊戯室に入ってしまうは私が立ち去っても大丈夫であっ

た。卒園まで残り少ない日々だが、ひとりでも多くの人と楽しい時間を共有してもらいたい。

二月五日（土）

初めて劇遊びに入ってみた。ちょっと無理かなという感じをうけた。途中泣きだしてしまふ。嫌な事が我慢できなくなると泣けるということは、気持ちを表現できるようになったと捉えたい。少し我慢して、少しくらい楽しい気持ちになれるような参加の仕方をしていきたい。楽器遊びの方はどうにかできそうだ。今日初めてタンバリンの役をやったが、二度目の時はだいぶ打ち方を覚えていた。

二月十日（木）

Nが当園して十分後くらいに私が園に着いた。Nに「おはよう」と言うが、色塗りをしている無表情であった。外でパンジー植えをするので「外に行こう」と誘うと色鉛筆、マーカーペン、クレヨン、お絵かき帳を持って私の後を付いてくる。しかし玄関の所で「遊戯室」といって私の手を引く。今日も「ひとり

行っておいで」と言ってみたが、泣くだけでひとりでは行けなかった。私が外に出ると上履きのままついてくる。しばらく泣きべそをかいていたが、飛行機ジャングルで私の膝の上に座ると少し気持ちが落ち着いたようだった。もう少しで卒園なので、あまり泣く事なく楽しい気持ちで過ごして行けたらよいのかなとも思ってしまう。

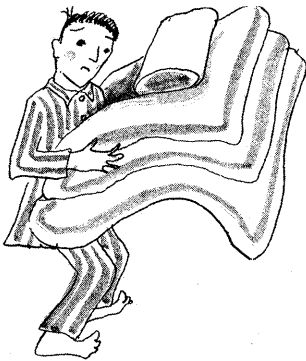
一月十五日（火）

今日は久しぶりに遊戯室で一緒に遊んだ。もう嬉しそうな顔をいっぱいに出してくれる。抱っこをしてぐるぐる回したり、一緒に走ったり、積木に登ってジャンプして飛び降りたり、本当にいい顔をしている。こんなに楽しそうな表情は久しぶりに見たような気がする。やはりNにとって一緒に体を接して遊ぶことが、まだ大切なのだなあと痛感させられる。

一月十六日（水）

ひまわり組でのカレンダーマーチ、コンコンクシャンの発表を交流クラスの友達や先生の前で行った。合

奏は、大太鼓をしっかりと自分のパートで打っている。感動してしまう場面だった。歌は歌ってくれないが、その場に立っている。もうすぐ卒園だなあと思いが、



ら見ていると何とも言えない思いである。

月十七日（木）

楽器の部屋に行き、楽器を一種類ずつ出して椅子の上到一个ずつ置いていく。私がカスタネットをたたくとそれに合わせて体を動かしている。遊戯室では私はNを追いかけてくすぐったり体を動かして遊ぶ。逃げるとき声を出して笑っている。遊戯室で一緒に遊ぶときのNの表情とひとり遊びに入っていて私が関わろうとするときのNの表情は本当に違っている。どちらがよいのかは分からないが、笑っているNはいいな、と思ってしまう。

月十八日（金）

昼食時、N先生に両手で顔を抑えてもらおうとケタケタ笑う。私以外の先生といっても楽しさが味わえるようになってきたのかもしれない。

月二十二日（火）

家を出る直前に鼻血を出したそう。連絡帳に鼻血を出すとNはパニックになりじっとしてられず、抑

えて寝かせるしかないと言われていた。お母さんの方もパニックになってしまおうのだが、今回は表面は平静を装い「だいじょうぶだよ」となだめたそう。すると割とすんなり横になってくれたとのこと。最後に、「不安や恐怖心を取り除いてあげなければいけなかったのですね」と書かれていた。私の知っているNはほんの一部ではないことを改めて考えさせられた。お母さんのNへの思いや前向きな姿勢を陰ながら応援してあげたい。

二月二十五日（金）

卒園式の座席順で歯磨き指導に参加した。座ってから二〇分ほどで歩き出す。Nにとっては意味も分からないし、これ以上は我慢できないだろうと思ひ、「おんぶ」と言われておんぶをして遊戯室にいた。星組では歌の練習、証書の授与の練習をした。今度は終わるまで所定の場所を頑張らせた。一応自分の位置は覚えて、ひとりでもM子とA子の間に行く。立とうとしたが、「だめ」と座らせた。とうとう泣き出したが「泣

いてもまだだめだよ」と言つて座らせた。今回は泣いていても私は慰めてくれないし、最後までいなければいけないのだということが分かつてくれるとよいのだが。先生方に甘えて笑う姿がよく見られる。お母さんは「Nなりにもうすぐ終わりだということを感じているような気がする」と言う。

二月二十八日（月）

昼食前ブランコに誘つた。珍しくすぐに体を動かして外に出た。誰もいない園庭で一緒にブランコに乗つた。「みんな友達」「ワンパクマーチ」を歌うとNも所々声を出して歌っている。温かな陽気で気持ちよかつたのだろうか。一緒に歌うなどはめつたにないことだ。素敵な一瞬だつた。

三月四日（金）

体調が思わしくないようだ。顔色も悪く登園してすぐにジュータンに寝ころんでしまう。証書授与の練習が心配だったが、最後までよく頑張つた。途中少し泣

きべそをかきそうになつたが、どうにか椅子から立ち上がった。大声を出す事なく参加できた。昼食後に私の膝を枕にしてジュータンに横になつた。絵本を二、三冊読んであげた。

三月八日（火）

体調もすっかりよくなつてたくさん遊びたいらしい。しかし十一時降園と卒業式の練習など私からの思いもあり、Nの思いとうまくかみ合わない場面が多かつた。もう十分遊べないのは仕方ないなど感じる。いつも以上に甘えてくるのは卒園にむけてのNの精いっぱいなのだろうかと思つて止めたい。

三月九日（水）

今日も練習で終わった。どうにか椅子には座つていられるが本番に立ち歩かないか本心に心配だ。うまくできてできなくてもそれがNだと受け止めてあげたい。

三月十五日（火） 修了式

寂しいけれど嬉しいことです、とお母さんとの連絡

帳に書いた。無事に大きな怪我もなく今日を迎えられたことは幸せなことだ。式の間三人ともよく頑張った。Nは途中「Yせんせい」と言って立ち上がり私の所にこようとしたり。側に行き手をつないであげると、私の膝の上に乗ってくる。内心「どうしようこのまま椅子にすわらなかつたら…」と不安になったが、説得すると椅子に戻ってくれた。そのこと以外は本当によくやっていたと思う。E、S、Nが一段階成長した区切りとして今日の修了式を捉えたい。園生活はこれから先も頑張っていけるような小さな力を身につけさせてくれる所だと思つて、今日子どもたちを見送つた気がする。

一月十五日の連絡帳より

とうとうこの日が来てしまいました。今、Nちゃんと初めて会つた日のことをしみじみと思ひだしています。何を話しかけてもそしらぬふりをされて……。それが今では「Y先生、だっこ」と何度も言ってくれた

りするほど仲良くなれたなんて！ 時の流れは早いけど着実に身についたり、つながったりするものがあるのですね。Nちゃんとはゆったり温かい時間を共有できたような気がします。知らず知らずのうちに私もNちゃんのことが大好きになつていて、家に帰つても「Nちゃんどうしているかな」などと考えてしまうこともたくさんありました。ずっと一緒にいると本当に言葉でなくても気持ちを感じ取れる時があるんですね。「あつ、今怒っている」とか「ちょっと妬きもちゃいてる」とか、時には「先生大好きよ!?」と思つてる」などとなんとなく感じるのです。もちろん思い過ぎのことがほとんどだと思つし、どれくらい当たっているかはわからないのですが……。今日(14日)、Nちゃんが「飛行機ジャングル」と言つて私を誘いました。飛行機の上に二人で座り、私は二、三曲歌を歌いました。途中、何度も私の顔をまじまじ見て抱きついてきます。ブランコも一緒に乗つてやつぱり途中後ろを振り返り私の顔を見えています。Nちゃんなりにお



ことができたのだから。

(終)

別れの気持ち表現してくれているようで胸が熱くなりました。卒園はお別れで淋しいことだけれど、それ以上に嬉しいことなのですよ。元気に新しい門出を迎える

Y先生はこの時期、再びNちゃんが自分以外の人と関われるようになることを願う。しかしそれに対してNちゃんはどうしてもY先生と一緒にいたいことを涙や行動で訴える。そして一緒に遊んでいると非常にいい表情をしている。そこでY先生は自分の願いを修正すると、皮肉なことに逆にNちゃんが他の先生とも関わり始める。背中を押されて巣立つよりも大好きな人との関係をジャンピングボードにして子どもは巣立って行く。でもまだNちゃんはY先生と二人の世界の中にいたかった。Y先生との関係の中でNちゃんの「私」は育ち、その中だからNちゃんは安心して「私」を表現していた。この一年間の後半は、Nちゃんの方がむしろ大好きなY先生の願いにけなげに応えようとしていたように思う。修了式の練習やじっと座っていることなんて本当はNちゃんにとってはどうでもいいことなのだけど、Y先

生にもそれは分かっているのだけれど、Y先生はNちゃんを園の中で「特別」な存在にしたいくなかった。だから他の場面ではNちゃんの思いを尊重しても、でもここはしっかりやってほしいと伝えていた。そしてNちゃんは大好きなY先生の願いに応えようとしていた。そして最後にY先生は願いを持ちつつも「うまくできなくてもできなくてもそれがNだと受け止めてあげたい」と、今のNちゃんのありのままの姿を見つめている。

Nちゃんとの関係の中で、Y先生は一年間葛藤したり、分裂しそうになり続けた。しかし葛藤したり、分裂しそうになるほど揺らぎながらも人間対人間というところの対等さだけは揺らぐはずと持ち続けていた。Nちゃんの思いと自分の願いを、いつもいつも同じ重さで考えていた。逆に言えば、対等であろうとしたからこそ、Y先生は葛藤状況に身を置かねばならなかったとも言える。しかし一年間を改めて振り返ってみると、Nちゃんの変容に最も効を奏したのは、この対等たらんとするY先生の姿勢だったように思えるのである。

付記

保育の記録や連絡帳を活字にすることを承諾して下さったY先生とNちゃんのお母さんに感謝いたします。

(お茶の水女子大学生活科学部)

ある日の育児日記から

(47)

佐藤 和代



「初めてのお使い」というテレビ番組をご存じでしょうか。二歳から五歳くらいの子が、生まれて初めてひとりで買い物に行く。それを隠し撮りするのですが、なかなかおもしろいのです。より道する子、違うものを買ってしまう子、立往生する子。よし、圭も五歳。交通量の多い所で心配だったけど、そろそろお使いできるかな。楽しみ！

ところが。私の思い入れも知らず、圭は勝手に初体験をすませてしまったのです。家の中でお金をみつめて、「あつ百円おちてた、もらっていい？」お父さんが「いいよ」と言うと、そのまま

コンビニへ行ってガムを買ってしまった…。何よー、これが「初めてのお使い」？ 全然劇的でも何でもないじゃない。

がっかりした私が、友人にその話をする、「それはよくない。買い食いなんて許しちゃダメ」と責められてしまいました。確かにそうだけど、うちの子らしいといえはらしいわね。親の目からのがれたスキに成長してしまうというのも、子どもの成長のしかたのひとつよ。何もかも親がお膳立てしなくてもね…。

というわけで、責められたおかげで、逆にパチパチほめてやりたくなってしまう私。こういうの、アマノジャクというのかしら、親バカというのかしら。



有は2オ、トイレうんち…はいりんた'けど。

私の
子ども



時代(5)

夢のような明治

なかざと
中郷

せいこ
誓子

中郷さんに明治の頃のお話をうかがいました。中郷さんは明治二十八年(一八九五)年生まれ、今年で満九十九歳と大変ご高齢な方ですが、読書好きで、足立区主催の老人大学―あしだち大学―で学ぶ傍ら、俳句の会「くるみ会」の代表責任者もなさっていらっしゃるという、意欲満々のおばあちゃまです。(編集部)

◎東京下町月島、築地界限

生まれた所は福岡県小倉市、代々続いた瀬戸物屋でしたが、火事で丸焼けになりまして、それで

東京で一旗上げようと両親と私の三人で上京したのが数え年で四歳。かすかに覚えています。父が工業が好きだったもんで、私の五、六歳の頃か



ら、亜鉛の地金を作る工場を作ったんです。初めは月島でした。日露戦争の前ですから明治三十六〜七年ですね。月島はまだ本当の島で、工場も何もない埋め立て地でした。父はそこに三〇〇坪の土地を買って、工場を始めました。

三年生までは、築地小学校に通っておりまして。そのころは魚市場なんかありませんよ。居留地があります、外国人の住まいが一箇所にかたまっていました。

隅田川の下流、今でいう勝鬨橋はまだ渡しでした、永代橋えいだいからこっちはまだ橋かみどきがなかったんです。渡しを渡って佃島つくだじまがあり、月島にも政府でやっていた無料の渡しがありました。月島から築地小学校へ渡して通っていました。三年いっばいまで、月島から通っていたのは、私一人でしたね。

その頃の遊びは、おにごっことか、かくれんぼ、お手玉、あやとり、そんなもんですね。なわ

とびも少しはやりましたが、女の子ですからあまりしませんでした。お手玉はよくしました。母がよく作ってくれました。でも十歳ぐらいですから、満足にはできませんよね。おもちゃはままごとがいっぱいありまして、よくしました。買ったものもあるし、自分でそこいらに行つて草をむしってきたり…。まだ空き地がずい分ありましたよ。男の子と一緒に遊ぶことはありませんでしたね。絶対に男の子とは…。名前も知らない。

言問ひし鳥はかわらず業平忌

誓子

◎本郷の女学校へ

当時は尋常小学校が四年、高等小学校が二年まで、ちょうど私の時に尋常五、六年という制度になったんですが、私はちょうどその切り替えの時に当たり、尋常四年をしないで飛び級で五年程度の女学校の子科に入りました。その女学校は本



郷龍岡町、湯島天神のすじ向かいの小さな私立学校でした。知り合いの縁故がありまして、早いけどまあいいわ、いれてあげるよ」という訳でまいました。

学校へは毎日往復五銭の割り引き料金の市街電車で行きました。七時まで、人口に割り引きの札がかかっているんです。七時すぎるとそれが往復七銭になる。五銭ずつしかもらわないので、時間にあわないと歩いて行くんです。そして帰りはいつも歩き。本郷の湯島天神の前からいろんな道を通って帰りました。神田須田町まではあの道、この道。須田町からは日本橋を渡り、銀座から真四角に来ると小田原町から月島へ渡る渡しがあります、それで帰りました。冬など学校がお客様なんかで、遅くなりますと、渡し場まで着くに日暮れすれすれになるんです。あつ、最後の船があそこに行った！”と思うと、もう渡れないんで、今後はぐるっと大回りして明石町へ。つ

まり目の前にうちの工場があるのに、渡しがないとずつと遠回りして三〇分か一時間かかって帰る。そんな思いをして学校へ行きました。予科二年と本科一年まで通って「体も弱いし、お前は外に（お嫁に）行く子じゃないからもう学校へは行かなくてもいい。やめろ」って言われましてね、それからずっと家におりました。

学校は私立日本女学校といまして、校長先生が人望の厚い方で、式の時には渋沢栄一さんや東久世伯爵なんて方も講演にいらしてね。渋沢さんは校長先生のお友達だったろうと思うんですが、よくいらしたんですよ。全校生徒で三〇〇人かそこいらしかいないほんの小さな私立学校でした。当時の服装は着物です。洋服は一切着ませんでした。学校では一人二人洋服のお嬢さんもいらしたけれど、私は海老茶の袴と袂の長い着物でしたね。そのまんま学校の行き帰りも歩きました。一日のほとんどが学校とその往復です。



子科の時のお友達は一人、株式屋さんでお金持ちのお嬢さんがいました。みんな遠くからいらっしやるんで、そこのおうちに遊びに行ったこともないし、学校がひければさようならって一人で帰るんです。

往復切符の復切符を母に渡さないとおこられるんで、どうしても二時間かかって歩いて帰ってくる。そのおかげで今日まで足も体も丈夫。それは母に感謝しています。「体のためだから歩きなさいよ」っていわれましてね。小さい時は細くて弱くて、それが歩いて丈夫になりました。お蔭様でこの年になるまで一度も病院に入院したことはないの。足だけはなんとかね。

◎買物は銀座、日本橋へ、遊びは日比谷へ

渡しを渡って向こうが築地ですから、買物はみんな築地の方へ行きました。あの頃、魚市場はできたてぐらいでしたね。そして銀座の四丁目へ出



たりして、うちはよく銀座では木村屋のあんぱんなんか買いましたね。木村屋のあんぱんは有名でした。四丁目の角に服部時計店という大きな時計店があって、その隣が木村屋でしたね。今はもう



少し京橋寄りになっているでしょ。あの辺はあまり変わっていませんね。それから墨や筆を売っている鳩居堂。あそこへもよく行きました。日本橋のニンベンにもよくおつかいを頼まれて、鯉節を買いに行きましたよ。あのぐらい歩くのは平気でした。

遊びに行くのは日比谷公園とか。まだできて間もないころでしたよ。日比谷公園ができたのは明治三十五、六年だと思いましたがね。九つぐらいの時母に連れられて行きました。滝はありましたけど、まだまだ何もなくて。レストランの松本楼はもうありました。あれ一軒だけ。今のようにあんな大きな料理屋じゃなかったですね。九十年も前のことだから。でも、行ってちょこっと入れるような所じゃなかったですよ。ちゃんとお膳に座らなければ食べられないような、高級な人たちがいく所だったと思いましたがね。簡単に行けるようになったのは、ずっと後の話ですよ。

◎お花見は船に乗って

お花見にはよく行きました。うちに船があったもんですから、月島から船にのって隅田川を上りずーっと荒川の上流の足立の五色桜まで行きました。今のように自動車がありませんでした。時代ですから、工場の製品も馬力で運ぶんです。向こう岸まではどうしても船で渡してそれから馬力に積んで、小伝馬町の大門通りの金物問屋まで運びました。ですから、お花見もその船に乗って行ったんです。

お花見の時には船にお弁当やなんかいっぱい積んで、工場で働いている人も家族もみんな乗って、朝八時頃から帰りはもう日の暮れるまで。船でいくので歩かずにすみましたよ。荒川の五色桜っていう広い原っぱがありましたよ。白、赤、墨染めなど五色あったんでしょね。五色桜って有名だったんですよ。



◎歌舞伎は大好き

銀座に出るまでに、歌舞伎役者の中村芝翫しんむらという、後に五代目歌右衛門になった人ですけど、その芝翫の家があったんです。月島から渡しを渡っていく河岸かつぶちにね。よくその前を通過して銀座へ行きましたね。芝翫っていったら女形のねエ。脱疽だつそだか鉛毒だかのため立てないで、立ってもやっとヨロヨロぐらいでしてね。芝翫の淀君と云ったら天下第一品でした。

私、お芝居が好きでね、歌舞伎座が近いでしょ。母によく連れていかれました。ミソノ会とかミツワ会とか、安くお芝居が見られるんです。新聞に募集広告が出るんですよ。一円五〇銭か二円台で平土間ひらどまに行かれるの。平土間というと、四人座れるんです。母と一緒によく行きました。『菓弁かべん寿つき』といいまして、お菓子とお弁当とお寿司がついて、つまり昼の十一時頃から夜の八時頃まで通して見られる。『カベンス』って言い

ました。

舞台へ入っていく広い花道があって、その間にまた人が歩くだけの花道があって、その間あいたに四人位座れる枱席たいせきがある。お相撲と同じね。皆さん十一時か十二時頃から七時か八時の終わりまで一日楽しむわけです。お客さんは女の人が多く、まだ江戸時代の感じが残っていたんでしょね。花道の横はうずら席うずらせきって少しい高いんです。ひな壇ひなだんになってました。

出方でかたっていいまして、お相撲おさむけの裁着さいせき（袴）はいている人がいるでしょ。あれと同じ姿の出方がある。「ご用いかがですか？」ってききにくるの。一番先にご祝儀をちよつと渡しておくでしょ。そうするとご用ききにくるんですよ。上等は芝居茶屋から行くんですけど…。私も一、二回は芝居茶屋から行ったこともあります。それはえらい高くなります。ですからミツワ会とかミソノ会で行くと会費ポッキリで行かれますんでよく行きました。



うずらとか棧敷は高いのでたいがいのお客さんは平土間。そのあとは三階に上がって…。だんだん場代が高くなると、三階に上がって見ていました。

柝きねの音澄み身内のしまる夏芝居 誓子

◎明治天皇

川つぶちをまっすぐ行くと川向こうに海軍省の建物がありました。よく明治天皇様が海軍兵学校なんかへ卒業式の時など、いらっしやるんですよ。私、明治天皇様には二回お目にかかりました。ちょうどおつかいに行った帰り、お馬車ですれちがったり。そういう時はあまり行列がないでしょ。ですから、あ、あ、何か人が並んでいる。何だろうな、と思うと、そこへ天皇さんがお馬車で…。陛下はうしろに座っていらして、徳大寺侍従長さんが、低頭ていとうといってお首を前に下げたまま。さぞお首が痛いだろうと思うほど、侍従長は

そうやったまんま。橋を渡って海軍学校へいらっしやるところをお目にかかったことは、二度ほどありました。もう相当、お年をめした時でしたから、ヒゲをはやしてネコ背でいらしたけどね。

魚市場ができて、渡しを渡ってお魚を買に行った時も、何でこんなにお巡りさんが出るのかなと思っていると、たったたって、お馬車がぎて、私は「あっ陛下」と思って、ちょっと頭を下げるぐらいでした。おつかいにやらされた頃だから、十二、三歳だったんでしょね。

◎明治は昔…

市電は往復七銭で、すぐに九銭に値上がりしました。お豆腐やこんにやくが一銭五厘、おそばは二銭五厘、ハガキが一銭五厘の時ですから。往復も片道も七銭でしたかね。

今から思うと隔世の感っていおうか…。お金のちがいはとてもじゃないけど、ひと月に一〇〇円



取る方っていったら、相当な高級取りなんですよ。うちでも女工さんは最初は二〇銭、男が五〇銭か七〇銭でしてね、だんだんに上がっていくんですよ。

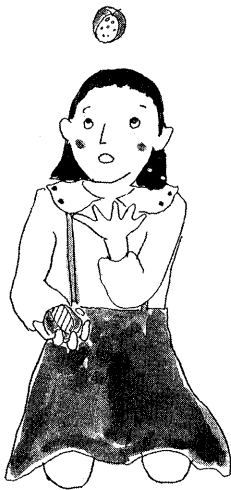
日本橋に高速道路ができたんですよ。しばらくぶりに行ったら、"あら、頭の上にとおしいものが..."ってびっくりしましたね。とにかくよく歩きました。今はもう変わってしまってますけど、東京のことは詳しいのよ。お茶の水の景色の良かったこと。下の方に駅がありまして、橋の上から木がかぶさって川が下の方に流れている。水もきれいでしたよ。神田小川町、須田町あたりにもぎやかで、寂しい所はありませんでしたね。勝鬨の渡しは夜通しあるんです。ここの渡しは古くからありましたね。今は勝鬨橋になっているけど。東京の人はみんなよく歩きました。市街電車の会社が三つぐらいあって、どれも切符がちがって通用しないんですよ。だから、よく歩きま

した。

銀座から浅草まで地下鉄に初めて乗ったのはいつだったかな。私の時代は何でも初めてでした。電気がついた時は十二、三歳の頃。ランプのそうじをしなくてよくなって"やれたすかった"と思ったの。そんな時代でした。

今から思うと夢のような時代でしたね。八十五年、六年も前の明治の話ですよ。

(東京都足立区在住)



(談／文責・編集部)

編

集

後

記

「私の子ども時代」のシリーズ、今回は、東京足立区にお住まいの中郷誓子さんを千住児童老人館におたずねして、お話をうかがいました。

中郷さんは百歳まであと一歩というお年にもかかわらず、お耳がとても達者で、とてもてきぱきとお話して下さいました。そのしゃきつとしたふるまいや話し方、気遣いに、下町の良家の育ちの良さとともに、明治の人の気骨を感じました。

九十九年の長い人生では、子ども時代はほんのわずか。「子どもの頃のこととはねー。あまり覚えていませんで、お役に立てないでごめんなさいね」とおっしゃりながらも、女学

校に通う道々の東京の昔の様子など、とても細かに話して下さいました。それにしてもよく歩いたようで、月島から本郷まで毎日歩くなど、今の子ども達には想像もつかないことでしょう。現在の東京は道路や地下鉄が複雑に張り巡らされ、ほんの少しの距離でも電車やタクシーを利用してしまいます。排気ガスなど何もない、澄んだ空気の東京の街を「今日ほどの道を通って帰ろうかしら」と探究心旺盛に歩いている、海老茶の袴姿の「おせいちゃん」の顔が目にかびます。

中郷さん、いつまでもお元気で明治の心意気を若い世代に伝えてあげて下さい。最後に仲介の労をとって下さいました、千住児童老人館の吉岡先生、坂入先生に心よりお礼申し上げます。

(K)

幼児の教育

第九十三巻 第十一号

(一九九四年十一月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成六年十一月一日

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一一二一一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三一一五三九五―六六〇四

振替 〇〇一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。



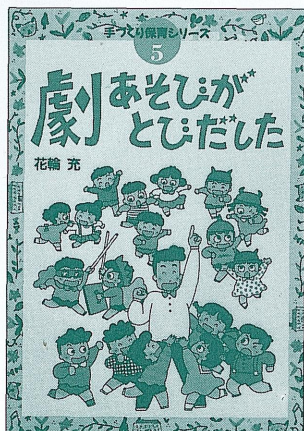
手づくり保育シリーズ④

保育に生かす 55の生活アイデア

出席カードを間違いなく貼るアイデア、スムーズに子どもを集めるアイデア、遊具の新しい使い方、無から有を生じる知恵・アイデアがいっぱい。傑作アイデアで園生活をもう一つ楽しくさせるハンドブックです。イラストいっぱいで作り方や使い方が一目でわかります。

ほいく♡けんきゅうかい・著

B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)



手づくり保育シリーズ⑤

劇あそびがとびだした

子どもの生活の中から生まれては消えていくごっこ遊びを、先生がちよっと言葉をかけ、かかわり、より大がかりな表現遊びへと発展させる。それが劇あそびです。さまざまなきっかけが劇あそびへと成長していく姿をコミック風に展開。行事やイベントの出し物にも活用できます。

花輪 充・著

B5判・104頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ①

歌ってだいすき —湯浅とんぼの遊ぼうた傑作選—

子どもと保育者でつくるオリジナル歌遊び。保育の現場から生まれた遊ぼうた50曲に新しい遊びをつけ、替え歌をつけて、よりヴァリエティある生活を楽しめる曲集です。

湯浅とんぼ・著

B5判・104頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ②

布でつくった アイデアおもちゃ

軍手、タオル、ストッキングなど身近にある布素材を使って作るおもちゃの作り方ガイドブック。子どもの好きな動物を子どもといっしょになって作り、遊ぶことができます。カラーページ多数

鈴木美也子・著

B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ③

思い出プレゼント

子どもたちが作った作品を、思い出いっぱいのプレゼントに手づくりしてあげます。友達同士のプレゼントや誕生会のプレゼントなどのヒントにもなります。

原寸大型紙付き。カラーページ多数

島田明美・著

B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

いきいき保育資料⑦

ザ・ペープサート



見せるだけのペープサートとは異なり、子どもと対話しながらストーリーを進めていく新しい形式の紙人形劇の演じ方と人形の作り方図説の解説書です。子どもでも演じることができるやさしい話の脚本もついていて、子どもの表現意欲を高めるのに役立つ保育資料です。

阿部 恵・著

B5変型判・80頁・定価2,500円(本体2,427円)

いきいき保育資料⑧

ザ・テーブルシアター



人形を持ってテーブルをかこめばそこが人形劇場に早変わり。人形はどこでも入手できるてぶくろが素材で、作り方もやさしくデザインされています。脚本は保育者と子どもとの対話が中心で、クイズ、歌、会話を盛り込んだストーリー展開ができるように作られていて、保育現場ですぐ活用できます。

「ひかりちゃんのおにわ」「てぶくろが化けたとさ」「プレーメンの音楽隊」「さるとかにのおはなし」の4つの話。脚本と演じ方の解説書です。人形の作り方つきです。

長縄泰子・都丸つや子/共著

B5変型判・80頁・定価2,500円(本体2,427円)

いきいき保育資料①

ザ・エプロンシアター①

- ①「はらぺこ かいじゅう」
- ②「おふろにはいろう」
- ③「ねすみの すもう」

いきいき保育資料②

ザ・エプロンシアター②

- ①「まる さんかく しかくなあに？」
- ②「うさぎさん インフルエンザ」
- ③「大きな かぶ」

いきいき保育資料③

ザ・エプロンシアター③

- ①「みんな ねんね」
- ②「りんごの木」
- ③「せんたくしましょう」
- ④「どうぶつ いっぱい」

いきいき保育資料④

ザ・パネルシアター①

- ①「三枚のおふだ」
- ②「ころころまてまて」
- ③「おばけの いつこちゃん」

いきいき保育資料④

ザ・パネルシアター②

- ①「ももたろう」
- ②「おおきくなったらね」
- ③「ハッピーパステール おつきさま」

いきいき保育資料⑥

ザ・パネルシアター③

- ①「ひつじかいとおおかみ」
- ②「たまごがころん あれあれノ」
- ③「あいうえおうじ」

阿部 恵・著 B5変型判・80頁・各定価2,500円(本体2,427円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。